

第83回 まちづくり夜楽塾記録

『街の色彩を考える(街色、心色、装い色)』

牧野怜子さん & 会員の皆さん(街の色彩を考える会)
平成 21 年 5 月 27 日(水) 19:00 ~ 20:30

2 グループに分かれてワークショップ(建物に関してご意見をそれぞれ一言ずつ記入)

Aグループ意見

・笠井街道沿いにある書店とその後ろにある紫のマンション

出来れば住みたくない。何が売っているのか分かりやすい。こういう色調だと店内が暗く感じる。買い叩かれそう。良心的な人がいる店には見えない。下品な色使い。派手なイメージ。強いコントラストでアピール性あり。

・152号線沿いにある看板

みんなそれぞれ頑張っているんだと思う。形は比較的あっているが、空間が気になる。

・初生町にある看板

色にだけ目が行ってしまふ。立ち止まって、ゆっくりなら見られる。交通事故の元。

・西部清掃工場(TOBIO)

商業的には目立ってよいと思う。アーチ状の屋根が水泳場だとイメージできる。青が多すぎる。統一感なくチグハグ。遊園地かと思った。デザイン性のある建物だと思いました。色の統一性がない。

Bグループ意見

・笠井街道沿いにある書店とその後ろにある紫のマンション

配色が汚い。都会、ネオンがある場所だったら合うと思うが、住宅が多い場所には合わない。何を売っているのか一目瞭然。視界に入れる割合が多くなると見にくい。キラキラ見えて敬遠してしまう。品が悪い。文字をデザイン化するか落ち着いたようにすべきだ。大きな面を持つマンションや建物は周囲の景観にあう落ち着いた色にすべきだ。マンションを目立つ色にする理由がわからない。

・152号線沿いにある看板

情報がありすぎて何を見たらいいのかわからない。縦横混在していて統一感がなさすぎ。看板が多すぎて、自分の行きたいお店の案内板を探すのに苦労しそう。とにかく汚い、並べ方を揃えるだけでもきれいに見えるかもしれない。

・宮竹のイトーヨーカドー付近にある看板

大きさ、色がバラバラ。雑然としている。一つだけ高さが目立って斗出している。統一されていないので見にくい。煩雑さが感じられ、通り過ぎたときには何の看板だったか覚えていなさそう。どの場所か記憶に残っている、パッと思い出せるという意味では印象深いものだと思う。下の看板が上の看板を引き立てているように見える。

・浜北の交差点にある看板

何をしたいのかわからない。ギョッとする。騙し絵のよう。

・西部清掃工場(TOBIO)

横のラインと縦のラインが混在しているのはなぜ? 清掃工場のようなものはグレーなイメージのものが良いのではないか。黄と青で相反する色を使用したのは何故? 清掃工場の汚いイメージを消そうという意図が強いのではないか? この建物、何年ここにある計画でしょうか、10年後これでいいのですか? 赤

と黄色の組み合わせは目立つので商業施設に使われるのはわからないでもないが、清掃工場では目立つ、ここまで目立たせる必要はないのではないか。大きな建物二つの色が異なるのは何故だろうと感じる。ページュ系の色の組み合わせをしたら良いと思うが…。

《牧野さんより》

みんな色を決めるときに主観で決めてしまう。自分の店の内装、看板だからこういう風にしてしまおう、という考え方をする人が多いのではないか。一番大切なことは、建物にしる、看板にしる、そのものだけではありえない。必ず背景があって、周りがあって、それから建物なり看板なりはその中で存在を示している。その建物だけを見れば、「素敵だな」「いい色だな」と感じる場合も多々あるが、その建物がその土地に建ったときに、あるいは周りの背景にその建物が建ったときに、その建物はどのような存在であるのか、どんなイメージをみんなに与えるのだろうかという観点で考えてみるといいのではないかと思う。また、感性やセンスはその人自身が持っている素晴らしいものだと思うが、主観的なものになりがち。そこに色彩の場合はプラス理論が入ることによって、どんな場合でも、どんな場所でも、どんな時でも、それに適した配色や色んな明暗というのが可能になってくる、そういう分野。

マンセル表色系（色のものさし）

色の三属性。色相、明度、彩度の三つの属性に従って体系化したもの。

色相は、色見の種類、赤、青、黄、紫、緑の基本5色相の間に、黄赤や黄緑、青緑、赤紫、青紫を挿入して10色相になっている。その10個を更に細かくわけていき、100に分けることができる。小数点以下も表示することができるので、このマンセル表色系というのは細かいところまで表示が可能。

明度は、明るさの度合い。1番明るい白を10、一番暗い黒を0として、0から10の間を段階的に分けて明るさのものさしを白黒で作っている。色の表色として表す場合は実際に見える色票化。見えるものとして1番暗いものでも1.0、1番明るいものでも9.5というものしか表すことが出来ない。

彩度は、鮮やかさの度合い。ものさしの右側にいけばいくほど、どの色も鮮やか。この彩度にも、それぞれ数値があり、無彩色、白、黒、灰色のラインを0、数字が大きくなるに従って色が鮮やかになっていく。このマンセル表色系は色見の種類に寄って鮮やかさの最高数値が違うのが特徴。表の中に赤い線で仕分けがあるが、赤線よりも右側のゾーンは外観の基調色として使用を制限する範囲と決められている。外観というのは公共的な性質をもっているため、大規模な建築物になれば人に与える影響が大きい。非常に彩度が高い鮮やかな色で大きな面積を覆ってしまうと景観を乱すことにも繋がりがねないので、規制が始まっている。真っ黒というのも規制の対象に入っています。

《牧野さんより》

色を数値で表す。そうすることでコミュニケーションや連絡など色表示が間違いなく出来ていく。色は見たままの世界があるが、もう少し深く踏み込んで数値で色を見る。そしてその色を適切な場所、適切な数値で使えるようになると世の中も快適になる。

《参加者の意見》

色を機械的に決めるのは良くないと思う。人には感性というものがあるから。西部清掃工場(TOBIO)についても私は、建築をした人はブルーを使って清潔感を表そうとしたのではないかと思う。日本は看板も建物も規制がすごく少ない。規制をするとメチャクチャに規制をする。長野県には色の規制がある。スイスにも規制がある。例えばラスベガスを例に出すと、ケバケバしい、でもあれは売り込みの為。今日みんなの意見を聞いていると看板がどうのこうのと批判ばかりで色をどのように使うかという話ではない気がする。住宅を見てもそうだが、今は2トーンカラーの家が多い、それが日本人のセンス。あれはアメリカのブラックピープルの真似。それを商業イズムによって扱ったら日本人が乗ってきただけ。

そういうところは学校で教育しない限り日本人は何でも真似する。先ほどみたいな機械的な色の決め方ではなく、やっぱりもっと一人一人の感性を大切にしたいほうがいい。建築物は、そこに建つ目的とか環境に合わせた色にしなければならないし、存在意義があると私は思う。

15年前、ハワイに行ったときの話。そこは夜景がとてもキレイなところだったのですが、町の上から見たときにきれいになるようにと町全体でネオン管を使わないようにしていた。まちづくりをそういうところからしていて、しかも島全体でそういうことをしていてすごいなと思った。浜松の街も鍛冶町だとか広小路だとかの町々で訴えるものが違うなと思った。私は袋井の駅前に生まれたが、今、新しいものと古いものがゴチャゴチャになっていて、調和されていない。時代物(東海道五十三次とか)を町全体で表現するのがとても難しい。今日の話聞いて、まちづくりに色ってというのは大きな役割をしているんだなと思った。